

# Summer

## 全国大会 参加報告 ～ 2024 ～

・第78回 国民スポーツ大会 近畿ブロック大会



Report No.2

# 第 78 回国民スポーツ大会 近畿ブロック大会 参加レポート

兵庫県 津崎 泰生

参加大会：第 78 回国民スポーツ大会 近畿ブロック大会

参加期間：2024 年 8 月 16 日(金)～8 月 17 日(土)

場所：和歌山県和歌山市

## 目次

1. 大会テーマについて
2. 研修会について
3. 担当試合について
4. 担当試合振り返り
5. 終わりに

### 1) 大会テーマについて

- a) テーマ：主審と副審の協力
- b) テーマ設定の背景について：試合中は様々な事象が発生します。最終決定は主審が行うものの、主審だけで全ての事象を把握することは難しく、試合をマネジメントする為にはその他の審判員の協力が不可欠です。24/25 の競技規則改正ではペナルティーキックの際に影響度も考慮する等確認事項が多くなっており、より協力が求められる状況に置かれていることから上記テーマが設定されました。

### 2) 研修会について

- a) 大会テーマについて補足（清水氏）
  - i) 例えば年齢、経験に差がある場合、副審としてフラッグアップを行うことは気を遣うのかどうか問いかけがありました。気を遣うという正直な意見も現場では出ている中で、改めて競技規則の文言を見直すと、以下の様に記載があることを確認しました。
    - ・5 条：他の審判員と協力して試合をコントロールする
    - ・6 条：反則を主審より明らかに事象が見えている場合に主審を援助し、主審に見えていなかった著しい不正行為について関係 機関に報告書を提出しなければならない。上記から副審、第 4 の審判員から明らかに事象が見えている場合には、サポートを”しなければならない”ということの大前提として再確認をしました。

b) ディスカッション① (清水氏)

i) 映像：第 60 回全国社会人サッカー選手権大会 D ブロック 2 回戦 神戸 FC1970 vs FC BASARA HYOGO 後半 27 分 30 秒 ペナルティーキックの判定について

ii) ディスカッションテーマ

- (1) 率直な感想は？
- (2) 副審として何をすべきか？
- (3) 副審としてプレーの展開はどの様に予測すべきか？
- (4) 主審としての準備は何か？
- (5) 主審として副審に求めたいものは何か？
- (6) レフェリーチームとして理想的な展開はどの様なものか？

iii) ディスカッション概要

- (1) 率直な感想は、判定は全く問題ないが、DF の選手が主審ではなく、タッチラインとペナルティーエリアの交点に向かう副審にアピールをしに行ったのが予想外だったというものでした。
- (2) 副審としては、右サイドからのクロスの場合、ハンドの見極めを副審のみで行う可能性があるファウルの予測の部分と、主審の判定を指示することをコーナーフラッグを回るアクションで示すことや、声でのサポートの可能性(現場での納得感を目的として、主審から協議ではない形で口頭での確認を行う可能性)を想定しておく必要性について話が上がりました。
- (3) 主審としては、重大な判定を行う際には主審ではなく副審に選手が詰め寄る可能性を理解しておくことや、事前の打ち合わせとして副審にハンドの見極めと、判定に同意するアクションとしてのランニングを行うことを依頼する必要性があるという話が上がりました。

iv) まとめ

今回のシーンでは、納得感の観点から理想的なものは笛と旗が同時に上がること清水氏から共有がありました。ハンドでは副審のサポートが必要になるケースが多く、自分が見たものとレフェリーが見たものが違うのではないかと不安を超えて勇気を出してサポートするという副審としての心づもりについて言及がありました。

心づもりについては、大西氏からは「これファウルやん、あかんやんと普通に振れるサポート出来るようになることが大事。勇気出さなと思うと躊躇する。勇気がある人しかサポート出来ないではいけない。」、松尾氏からは「素直さだと思う。素直さには勇気はいらない。綺麗な鏡で写して、素直にサポートをする。」というコメントもありました。

c) ディスカッション② (清水氏)

i) ディスカッションテーマ

- (1) 今大会を成功させるために審判チームに課されたものは？
- (2) 審判員として自分自身に課された役割とは？
- (3) シーズンターゲットである「普通」レベルをアップさせるためには何をすべきか？

ii) ディスカッション概要

- (1) 審判チームとして課されたものとしては、1試合のみに割り当てられているのではなく、大会に割り当てられていることを再確認し、矛先がレフェリーチームに向かないように、選手が負けを受け入れてもらえるようにすること、またその為に、上記ディスカッションでの審判チームとしての協力の必要性があることが話に上がりました。
- (2) 審判員として課されたものとしては、各府県の代表として派遣されている背景から、大会で得たものは地域に還元をしていく責任があることや、今大会の特性としてチームも府県を背負っており、通常のリーグ戦やクラブチームの試合とは異なる思いがあることを理解し、受け止めることで、これが「普通」のレベルアップにも繋がると意見が上がりました。
- (3) 「普通」のレベルアップの観点では、上記の意見の他には、今大会のテーマを実践しようとする（素直に、普通にサポートが行えるようになること）、その為に勇気が必要なシーンがあるかもしれないと意見が上がりました。

d) ディスカッション④ (角山氏)

i) 映像：J3 リーグ 奈良クラブ vs アスルクラロ沼津 96分 32秒 ベンチ役員  
の異議への対応と再開方法について

ii) ディスカッションテーマ

- (1) 何が起こったか？
- (2) 副審、第4の審判員として何を伝えるか？
- (3) どのタイミングでどの様な方法で、どの様に伝えるか？
- (4) なぜこの様な再開になったか？

iii) ディスカッション概要

- (1) 事象としては、奈良のフリーキックを沼津 GK がゴールライン上でキャッチしたプレーに対して、奈良監督がボトルを蹴り、ベンチ役員数名がテクニカルエリアを出て第4の審判員に抗議、主審はインプレー中だがプレーを止め、異議を示したコーチと、ボトルを蹴った監督に警告を示したもので、本来はベンチ前からの間接フリーキック、またはゴールキーパーへのドロップボールで再開すべきものを、ゴールキックで再開した場面と整理をしました。

(2) 再開方法が間違ってしまった原因を考える上で、現場では主審と副審2は再開方法を把握していなかったが、第4の審判は正しい情報を持っておりインカムで情報を伝えたものの、副審1のゴールキックで再開という助言が採用されたことが事前情報として共有されました。プレーを停止した位置と、停止した理由（ベンチへの注意か、警告かで再開方法が変わる）がすり合わせ出来ていれば正しい再開に導けるものの、そのすり合わせがされずに再開方法のみ話をしてしまったことが原因と考えられます。情報を正しく共有すること、違和感がありインカムでの整理が出来ない場合、4人の審判団が集まって直接コミュニケーションを取ることも選択肢として持っておくことを再確認しました。

iv) まとめ

協力という言葉には“力”が4つ、+が1つ含まれていることから、4人の審判員の力を足し合わせることが協力という再認識の上でとても適していると角山氏から紹介がありました。主審と副審だけではなく、第4の審判員としてもサポートをする準備をしておくことや、特にJ3やJFLの第4の審判員担当する際は自分よりも上級の審判員に助言する必要があるが、上級なので正しい判定を導いているだろうと思わずに疑念がある場合には必ず現場で確認を行うことが改めて共有されました。

### 3) 担当試合報告

a) 2024年8月16日(金) 16時キックオフ 少年男子

対戦：奈良県 vs 和歌山県

割当：正木氏、津崎、井城氏、森岡氏

インストラクター：西面氏

会場：紀三井寺公園陸上競技場

b) 2024年8月17日(土) 9時30分キックオフ 成年女子

対戦：京都府 vs 兵庫県

割当：杉田氏、宮尾氏、別處氏、津崎

インストラクター：西面氏

会場：紀三井寺公園球技場

c) 2024年8月17日(土) 16時キックオフ 少年男子

対戦：大阪府 vs 奈良県

割当：津崎、森岡氏、青木氏、杉田氏

インストラクター：西面氏

会場：紀三井寺公園陸上競技場

#### 4) 担当試合振り返り

##### a) 担当試合 a)でのタッチジャッジについて

右側ベンチ前付近でのラインアウトの際、差し違いは起きなかったものの主審と副審が一瞬見合いラインアウトしてから方向指示までのタイミングが少し遅れたものがありました。インストラクターからは、副審がシークレットを示していたこともあり、主審が情報を持っていないのであれば副審に委ねる（主審は情報を持っていないことをジャスチャー等で伝える）余裕があったら良かったのでは、とのコメントがありました。試合後、主審との振り返りの中では、副審が先に主張することも出来たという可能性の中で、私より経験のある主審だったこともあり、これまでに何度かレフェリーチームとして組んでいたことで、やり辛さは全くなかったものの、副審としては一瞬の判断、行動の中にまだ遠慮が残ってしまったのでは、と整理をしました。

##### b) 担当試合 b)での時間管理について

後半のアディショナルタイム 7 分を掲示した後に負傷によりプレーが停止、最終的に公式記録上は+9 分に得点が決まるという事象がありました。失点をしたベンチからは特に時間に対しての問い合わせはなかったものの、主審とのコミュニケーションに問題がありました。

第 4 の審判員の私は主審に負傷の対応の完了後、「時間を追加しますか？」と確認を行い、主審から「しない」と反応があった様に聞こえました。（実際には交代の手続きの際に使用したボードに"1"の表示が残っており、主審はそれに対して OK と返答していました。今回の問題点はここではなく、後述の点です。）振り返りでは、そもそも「時間を追加する」という言葉遣いにリスクがあるという話が出ました。アディショナルタイムはあくまで定められた試合時間(今回であれば 70 分)において空費された時間を追加するもので、アディショナルタイム中の負傷や交代については追加されない（プレーも時間も止まっている）という理解を合わせた上で、「時間を追加しますか？」ではなく、「何分間止まっていたので、あと何分アディショナルタイムが残っていますね」という確認をするべきだったと振り返りを行いました。

##### c) 担当試合 c)でのゴールキック、コーナーキックの判定について

副審 1 の前からのクロスに対して、ニアに両チームの選手が飛び込みオフenseが触った後、ゴールラインを割り、主審の笛でゴールキックを示しました。この場面では、主審からは確信がなく、副審側のゴールラインであった為副審のアクションを観察しましたが、分かりやすくノーリアクション（分からない素ぶり）だった為、主審の判断のみで決定し、副審が合わせる形になりました。振り返りでは、差し違いにならなかった要因として、アイコンタクトが出来ていることは勿論のこと

ながら、副審がノーリアクションを買ったこと（お見合いをした結果、やっぱり副審が自分で決めなくてはとならなかったこと）が良かったとインストラクターからコメントがありました。見えたものをサポートするだけでなく、見えなかったものについて情報がないと行動で伝えることは、特にインカムがない試合においては大事になると振り返りました。

## 5) 終わりに

今大会は全国大会の出場が掛かっており、府県を代表した選抜チームであるという背景があります。大会に臨むに当たり、チームは通常のリーグ戦での<勝ちたい思い>とは少し異なるものがあるなど、府県の代表としてのプライドがあるな、と想像しつつ、「その思いを受け止められるだろうか」「気持ちよく負けを受け入れてもらえるような試合にしなければ」と、“ミニ国”への参加は初めての機会だったこともあり、緊張感を持って試合に入りました。

1 試合目では副審としてのノットオフサイドの判定が開催地の和歌山県の負けに繋がるということがありましたが、正しく見極められたことに、どっと疲れる程の安堵感を覚えたり、3 試合目では大阪府が国体本選への出場を決める試合を主審として担当し、両チームとも PK 戦にもつれ込むような好ゲームを展開してもらったことや、選手、ベンチと試合後に握手をした時の振る舞いから、敗戦した奈良県も判定を受け入れてもらったな、ということに同じく安堵感を覚えて大会を終えることが出来ました。この安堵感の大きさが、大会の前に「選手の思いに寄り添えるだろうか」と気持ちを巡らせたことの一つの結論だとすると、この大会を通じて少しは寄り添えることが出来たのではないかと、と今振り返っているところです。

この大会で得た学びをまた現場で表現し、今後も寄り添える器を大きくしていけることが、地域への何よりの還元につながると信じて努力していきたいと思えます。

最後になりますが、今大会への派遣から、ご指導をいただいた関西強化部の皆様、審判員が全力を発揮出来る様、様々な環境整備を施していただいた和歌山県サッカー協会の皆様に感謝をお伝え申し上げます。

このレポートが大会で経験させていただいた事を還元するものとして、皆様のお役に少しでも立てる事を祈っております。